研究・調査報告書

報告書番号	担当
２６４	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門

題名（原題／訳）

Binge pattern of alcohol consumption during pregnancy and childhood mental health outcomes: longitudinal population-based study.

妊娠中のアルコール摂取と幼児期のメンタルヘルスとの関連について～長期的な疫学研究より～

執筆者

Sayal K, Heron J, Golding J, Alati R, Smith GD, Gray R, Emond A.

掲載誌（番号又は発行年月日）

Pediatrics. 2009 Feb;123(2):e289-96.

キーワード

妊娠、出生前のアルコール暴露、アルコール摂取、胎児性アルコール障害、メンタルヘルス問題、活動亢進、IQ、ALSPAC（英国のブリストル大学で行われている「Avon Longitudinal Study of Parents and Children (ALSPAC)」という研究）

要　旨

目的：
妊娠中の短期大量飲酒（binge drinking）のようなアルコール摂取パターンは平均の飲酒量と同様に後に生まれた子供の幼児期のメンタルヘルスや学習問題に関与するかもしれない。しかし、飲酒そのものが突発的なものなのか、それとも規則的に飲酒をしているという背景があるのかを区別することは難しいとされる。この長期的研究は、アルコール摂取パターンが独立して幼児期のメンタルヘルスと認知機能の発達に関係するか、性差があるか、そして妊娠中に日常的な飲酒をしない中での、時々の多量飲酒が危険になるのかという事を調査した。

方法：
この前向きな疫学研究は親と子供のエイボンの縦断的研究データを用いて行われた。
我々は妊娠第２期（16～27 週）から第３期（28 から 40 週）において１日４杯以上の飲酒パターンを持つ者と、47 から 81 ヶ月の子供（各々6355 人と 5599 人）のメンタルヘルス問題を調査した。我々はまたサブグループでは、子供の 49 ヶ月児（924 人）における IQ とこれらの関係についても調査した。

結果：
出生前と出生後のリスクを調整した後、１日４杯以上の飲酒をしたグループでは 47 ヶ月児の女の子と、81 ヶ月児の男女双方で、メンタルヘルスの問題（特に活動亢進、不注意）との関連が見られた。交絡因子の調整の結果、IQ について関連は認められなかった。日常的な飲酒がない場合の、１日４杯以上の飲酒はメンタルヘルス問題（特に活動亢進、不注意）においてリスクであることが分かった。

結論：
妊娠中の時々の１日４杯以上のアルコール摂取は、中等度の飲酒習慣がない場合において幼児期のメンタルヘルス問題に及ぼすリスクを増強させる可能性がある事が分かった。特に活動亢進と不注意問題に関係するのではないかという事がわかった。